人文・ジャーナリズム学科30人が初のインターンシップ

開設4年目になる文学部人文・ジャーナリズム学科では、昨年、就職活動を前にした3年次生30人が新聞社、図書館、印刷会社などで初のインターンシップを行った。その成果発表会が1月、神田キャンパスで開かれた。

毎日新聞横浜支局で奮闘した森本直子さん（4年次）の体験記と受け入れ側の山本修司社会部長（前横浜支局長）からメッセージをいただいた。

毎日新聞横浜支局で記者体験　森本　直子さん（文4・山田健太ゼミ）

釣り大会取材に苦闘
◇署名記事掲載に感激◇

「はい、魚を顔の横にもって笑ってー」

昨年8月、毎日新聞横浜支局で2週間インターンシップをさせていただいた。初めての取材は釣り大会で、相手は7歳の女の子だった。

釣りの感想を聞いて、写真を撮るよう指示されていたのだが、この日、私が乗った船は不漁。真夏の炎天下で甲板の照り返しが厳しいなか、数時間根気よく粘って釣った魚を手にした女の子の表情は、うれしさあふれる笑顔というより、釣れてほっとしたような表情だった。

なんとか絵になるような写真を撮ろうと必死になって彼女を笑わせようとした。撮った写真は分かりづらいものだった。インタビューにも苦労した。大会の終盤に話を聞いたため、疲れていて言葉は少なく、付き添っていたお父さんに代弁してもらいながら話を聞くという状況だった。大会を終えた後、すぐに取材で使えそうなものを駆使して、どうにか記事を書いた。

記事はデスクの方に直していただき、翌日の神奈川版に掲載された＝写真左。記事は署名入り。悪戦苦闘しながら取材して書いた記事が実際の紙面に載り、すごくうれかった。

しかし、しっかり取材したとはいえ、本当にこの情報が知れわたって大丈夫だったのかという不安も残った。

記者の皆さんとともに軟式高校野球大会、展覧会、神奈川県知事の定例会見などさまざまなところへ出かけた。取材は思った以上に難しく苦戦もしたが、自由に仕事をさせていただいたため、頭と体を使って学びながら、楽しく毎日を過ごすことができた。

記者という仕事でとても重要だと感じたのは「人とのつながり」。それは「感謝の気持ち」を持つことや「心配り」をすることなのだと知った。

記者の仕事は、ひとたび何か起きたらすぐに駆けつけ、事件・事故など気が引けるような取材もする体力的にも精神的にも大変な仕事だと思った。

しかし、毎日、それまで知らなかった物事に触れ、さまざまな人々に話を聞き、伝えることは魅力的なこと。それは辛いことにも勝るのだろうと感じた。

新聞記者を志望したのは、ジャーナリズムを学んでいたことも一つだが、2年次に新聞協会賞受賞者の講演に共感したことが大きなきっかけだ。毎日新聞は自宅で購読しており、一番身近に感じる新聞社だった。

インターンシップ後はますます記者に憧れるようになった。

山本支局長から教えていただいた言葉の一つには「記者は物事を優しい目で見ることが大切」とあった。

今の私の目標は支局でお世話になった方々のような記者になることだ。この気持ちを大切にし、いつか目標を達成できるよう諦めずに努力していきたい。

キス釣り、五目釣りを堪能した毎日釣り教室の参加者たち＝三浦市小網代で、長真一撮影

毎日釣り教室

親子連れら40人参加
三浦沖でシロギスなど

大海原で親子たちが触れ合い、マリンレジャーの安全やマナーを学ぶ2012毎日フィッシングフェスティバル第32回「毎日釣り教室」（毎日新聞横浜支局、釣り船・丸十丸主催、湘南毎日会、神奈川トヨタ自動車、京浜急行電鉄協賛）が7日、三浦半島沖合の相模湾で開かれ、夏休み中の親子連れなど約40人がキス釣りや五目釣りを楽しんだ。【森本直子、堀賀綱インターンシップ生、長真一】

キス釣り船は三浦半島・諸磯沖などで、10～24㌢のシロギスが上がった。五目釣り船は小網代沖で、40㌢級のソウダガツオが入れ食いとなり、30㌢級のアジも釣れた。

父親の趣味が釣りで、3歳から一緒に楽しむようになった横浜市保土ケ谷区の清水英代さん（7）は、最大で13・1㌢のシロギスを釣り上げ、満足そうな笑顔を見せた。川崎市宮前区の安岡将和君（4）は祖父と参加。シロギスの誘いは祖父よりうまく、「糸をゆっくり1回巻いて、2回速く巻き、もう1回巻く」変速技でイイダコまで釣り上げた。

表彰式では、成績優秀者に協賛団体・企業からトロフィーと副賞が、また、参加者全員に参加賞が贈られた。成績は次の通り。（敬称略）

【キス部門】
▽最優秀賞　遠藤勝宏（65）24㌢＝寒川町▽優秀賞　呉地泰夫（54）21・2㌢＝南足柄市▽同　出町充（59）14・5㌢＝寒川町

【五目部門】
▽最優秀賞　千葉義弘（68）アジ33・5㌢＝川崎市▽優秀賞　望月寿直（38）同31・5㌢＝葉山町▽同　望月律子（14）同31㌢＝同

シロギスを釣り上げた清水英代さん＝森本直子撮影

頑張れ!!

思い起こした「書く喜び」

山本　修司　毎日新聞東京本社社会部長（前横浜支局長）

自分の書いた記事が新聞に掲載される喜び―。新聞記者として長年過ごしているると、息をするように取材をして、原稿を書けるようになる一方で、こんな新鮮な感覚を忘れがちになります。毎日新聞横浜支局がインターンシップ生として受け入れた文学部人文・ジャーナリズム学科の森本直子さんと過ごして、私は改めて、記事を書く喜びを思い起こすことになりました。

研修内容はまさに記者の仕事です。昨年8月6日から2週間、森本さんは、軟式高校野球南関東大会決勝や反戦美術家の展覧会、支局主催の釣り教室などを連日取材しました。毎日新聞は原則全記事署名入りですから、森本さんの署名も出ます。釣り教室では掲載写真に「森本直子撮影」というクレジットも。さすがに最初は「まさか本当に自分の書いた記事や写真が載るとは」という怖れや戸惑いも見えましたが、その分だけ、翌日の新聞を見て目を輝かせる森本さんからは、喜びがあふれ出るのが見えるようでした。私はデスクと「俺たちは新鮮な気持ちをちょっと忘れてたな」などとしきりに反省したものです。

記者と同じ仕事をするわけですから、そのための指導もします。私は、細かい要領ではなく、取材相手としっかり向き合って優しい目で見ること、一度出会った人との付き合いを大切にすることを強調しました。記者にとって一番大事なことだからです。

それだけに、1月にあった「インターンシップ報告会」で、森本さんが「記者は物事を優しい目で見て、人とのつながりを大切にし、心配りと感謝の気持ちがあった。横浜支局で出会った方々のような記者になりたい」と言ってくれたときには胸が熱くなりました。

連日流れる膨大なニュースの一つ一つに記者の魂がこもっています。その中の約10本は森本さんによるもので、支局で過ごした日々の結晶です。これは私にとっても大事なものです。記者を目指す森本さん、頑張れ！

人物でめぐる図書館　―書棚の住人からあなたへ―

図書館企画展

偉人たちからの〝メッセージ〟

図書館本館（生田キャンパス9号館）の春の企画展「人物でめぐる図書館―書棚の住人からあなたへ―」が始まった。

展示の主役は古今東西の偉人たちが残した名言。書棚の側面に、偉人たちの顔写真や絵画とともにパネル展示している。偉人たちの名言は各分類の中から選ばれており、展示を通じて本の分類や、図書の並び方を体感できる。

またクイズラリーの企画も用意されており、各所に設けられたクイズの設問に答えながら、3階と4階のフロアをひと巡りすることができる。

「ひとつでも多くの心揺さぶられるメッセージに出会ってほしい」との願いから、人選や配色にも気を配り、クイズラリーも取り入れたという。

入り口付近では貴重図書を含む関連図書が展示されている。貴重図書の展示は期間限定（4月＝マリー＝アントワネット、5月＝カール・マルクス、紫式部）。企画展は6月28日まで。

外国語のススメ　LL研究室　―●19●―

英　語

長谷川　宏　法学部教授

40年前の少女ノルウェーのターニャへの手紙

▲ 2009年、米国滞在中、お世話になったC.-T.James　Huang先生宅で開かれたThanksgiving（感謝祭）のパーティで

しばらく前に、Facebookにこんな投稿をした。

「遠い昔、小学生の頃、研究のため渡米した親の後から私も渡米。英語なんてひとこともわからないまま地元の小学校に入った。当時（1960年代末）東洋人は珍しかったようで、みんな寄ってたかって親切にしてくれた。

ターニャ（Tonje）というノルウェー人の女の子がいて、私より先に米国に来てもう英語が上手になっていた。まだ英語ができない私を過去の自分に重ねてか、一生懸命英語を教えてくれたり親切にしてくれた。ウェーブのかかった茶色の長い髪の彼女に、まだ子どもの私は自然と好意を抱いた。

しかし気に入った子にかえって意地悪をしたり嫌がるような言動をしてしまうという、それぐらいの年（小学4年生）の男の子にありがちな態度を取ってしまい、ものの見事に嫌われた。

日本に帰国するとき、クラスのみんなが集まってきて、『ほんとに帰っちゃうの？』と別れを惜しんでくれたのに、ターニャだけは遠くでそっぽを向いて、『ふん、Hiroshiなんかとっとと帰ればいいんだわ』という顔をしていた。

あれから40年余り。ふとGoogleしてみたら、ノルウェーの病院のサイトに、女医さんになっているターニャの写真があった。ちょっとお年を召した感じはあるけれど、面影のある懐かしい顔。なんとメールアドレスもちゃんと載っているのだけど、思い出は思い出にしておくのがいいのだろうな…」

これはもう40年以上前の話。

＊続きはLL研究室のホームページで